

‘ヒゴムラサキ’の舌出し果発生に対する施肥と育苗温度の影響

○古閑三恵・小野誠
(熊本農研セ)

【目的】

当研究センターで平成14年に育成された‘ヒゴムラサキ’は、従来の熊本長ナスと同様に、果皮・果肉ともやわらかく甘みがあり、良食味であると高い評価を受けている。しかし、収穫期間の初期に舌出し果とよばれる奇形果の発生が多く問題となっている。この舌出し果の発生は、施肥量や温度と関連があるとされていることから、育苗期間中の気温および基肥の種類が舌出し果発生に及ぼす影響を明らかにし、舌出し果発生の低減対策について検討した。

【材料および方法】

育苗温度および基肥種類の検討：2005年1月27日に‘トバム・ビガー’を、2月10日に‘ヒゴムラサキ’を播種し、幼苗接木を行って4月6日～28日まで昼温－夜温 30-25℃および 25-20℃の条件下で育苗し露地に定植した。定植時の基肥は、初期溶出の少ない夏秋ナス・ピーマン一発、施用後18日間に約25%の溶出がみられるロングステージを用い、苦土重焼燐等を用いてN:P₂O₅:K₂O=45:35:22.5(kg/10a)に調整し施用した。

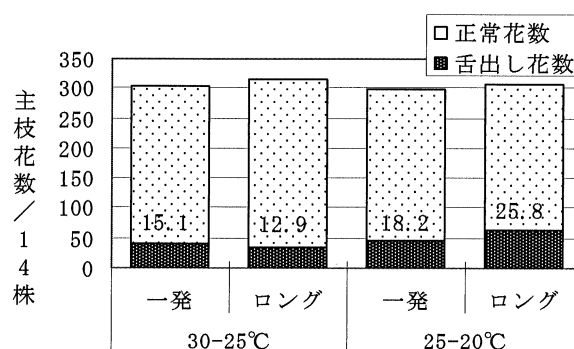
育苗温度の検討：熊本県経済連より購入した、‘台太郎’を台木とした‘ヒゴムラサキ’の接木苗(72穴セル苗)を12cmポットに鉢上げして、5月17日～6月15日まで昼温－夜温を25-10℃、25-15℃の条件下で育苗し、阿蘇地域の雨よけ施設内に定植した。基肥は夏秋ナス・ピーマン一発を用いてN:P₂O₅:K₂O=30:30:15(kg/10a)を施用し、現地育苗の苗を対照として同様の調査を行った。

いずれの試験も、畝幅2m、株間70cm、V字3本仕立てとし、主枝に開花した花の柱頭および蒴の奇形を確認して舌出し果となる奇形花の数を調査した。

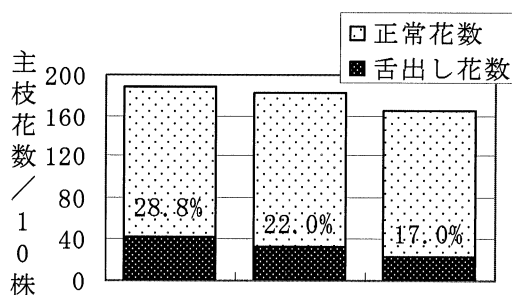
【結果及び考察】

舌出し果となる奇形花は、蒴の先端が柱頭に変化しているものや、本来は蒴が形成される位置に柱頭が形成されるなど、通常より柱頭数が多い花で、開花時に確認することが可能であった。これらの奇形花は、ロングステージで育苗温度による差が大きく、夏秋ナス・ピーマン一発ではその差は小さかった(第

1図)。阿蘇地域における現地栽培では、栽培開始時に前作のメロンや堆肥等の影響と思われる土壤窒素量がやや多いうえ育苗期間中の気温も低く、現地で育苗された苗は25-10℃および25-15℃育苗の苗と比較して奇形花の発生がやや多かった(第2図)。これらの結果より、‘ヒゴムラサキ’における舌出し果の発生は基肥の肥効の違いによる影響が大きく、さらに、基肥の初期溶出が多い条件下では、育苗温度が低いほどその発生が多くなると思われた。したがって、‘ヒゴムラサキ’では、定植時の基肥量をやや少なくするか、初期溶出の少ない肥効パターンの肥料を用い、追肥を主体とした施肥体系が適していると考えられる。



第1図 奇形花発生に及ぼす基肥の種類と育苗温度の影響(数字は奇形花割合)



第2図 阿蘇地域における奇形花発生数(数字は発生割合)